View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

外交官・公務員研修における専門語彙の習得

石井容子・熊野七絵

〔キーワード〕専門語彙、語彙習得、初級レベル、オーラルテスト、繰り返される学習の場

〔要旨〕

本稿では外交官・公務員研修における初級レベルの専門語彙の習得の実態を明らかにすることを目的とし、研修の最終テストの一つであるオーラルテストの書き起こしデータと語彙学習の核となるスピーチクラスのスピーチ原稿を用い、1）オーラルテストにおける専門語彙の出現の分析、2）オーラルテスト結果とスピーチ原稿の比較、分析を行った。

その結果、初級レベルでも専門語彙が運用レベルまで習得されているという実態が明らかになった。また、各レベルによる使用語彙のトピック範囲や使われ方の特徴が特定できた。専門語彙の習得には、核となるスピーチクラス及び他科目との有機的なつながりという「繰り返される学習の場」が寄与していると考えられる。

この分析結果は学習者にとっての専門語彙の学習目標設定、また教師にとっての教材開発の目安としてコースデザインに還元していきたい。

1．はじめに

国際交流基金関西国際センターで実施されている外交官日本語研修・公務員日本語研修（以下、「外交官・公務員研修」)は、各国の若手外交官および公務員を対象とする 9 ヶ月の日本語研修である。研修参加者のほとんどが日本語ゼロ初級であるが、将来在日公館に、あるいは自国で日本関係の部署に配属される可能性が高いことから、研修は職務上のニーズに対応できる日本語能力、中でも口頭運用能力の習得に重点が置かれている。そのため、研修の最後には最終オーラルテストを実施しているが、テスト結果の分析から、上位者は初級レベルであっても基本的な文型に専門性の高い語彙を入れ込み、結束性のある段落を構成することである程度まとまった専門的な内容を伝えていることが明らかになっている（熊野他 2005)。

つまり、初級レベルの専門日本語研修では、上記のような上位者の特徴が実現可能な目標ともいえる。では、それを支える「専門語彙」とは具体的にどのようなものであり、どの程度習得されているのだろうか。また研修の中でその習得に寄与しているものは何なのだろうか。本稿ではこれらの「専門語彙」の習得の実態を明らかにしたい。

2．外交官・公務員研修における「専門語彙」

2.1　「専門語彙」とは

近年、専門分野別の語彙調査や分類に関して様々な研究、報告がなされており、そこでは「専門語」「専門用語」といった語が使用されていることが多い。しかし、これらは留学生教育を前提としたアカデミックな研究のための分野が中心であるという点で、またある程度以上日本語学習が進んだ者を対象としている点で、初級レベルの研修である外交官・公務員研修の「専門語彙」とは異なっている。

いわゆる「専門語」「専門用語」より低いレベルの語彙を扱ったものとしては、小宮（1995）が専門教育の前提となる基本的な専門語について言及しているほか、深尾（2001）は「専門日本語」研究の展望として、留学生に意識されにくい日常語に使用される語彙と専門用語との間に位置する専門分野を越えた学術的な語彙を調査・分析する必要があると言っている。また、水本・池田（2003）は、留学生が専門分野特有の純粋な専門語だけではなく、普通日本人学生なら高校卒業までに一般社会常識として既に習得している常識的な語が理解できないと言い、その中で日本語能力試験 1 級語彙に含まれないものを「基礎専門語」として教育することが必要だと指摘している。一方、職務上の専門語彙については田丸（1994）がビジネス・スクールの日本語教育の場合、時間的制約の中で目標を達成するためには、専門色を打ち出すのは中級からという意識を捨て、スキル、語彙、文法項目すべてにおいて取捨選択するべきであり、語彙については経済・政治・経営関係の語彙の教育を早くから強化するべきだと指摘している。

では、初級である外交官・公務員研修における「専門語彙」とは何かというと、通常初級レベルでは扱われない専門に関連する語彙ということになるだろう。具体的には「外務省、外相」といった職務に関わる語彙や、「民族、観光地、政府」といった職務上必要な社交会話で用いる語彙などが考えられる。また、初級レベルの語彙であっても「首相、大使館、大統領、貿易」など専門に強い関連がある語彙もここに入れるべきであろう[(1)]。本稿ではこれらを外交官・公務員研修における「専門語彙」とする。

2.2　研修における専門語彙学習の場

外交官・公務員研修は全 9 ヶ月を 3 ヶ月毎の 3 期に区切り、1 学期は基礎的な日本語能力の養成を、2，3 学期は基礎的日本語学習と平行して専門性に配慮した選択科目を実施している。学習開始後わずか 3 ヶ月で専門的な内容を扱うことになるが、研修参加者は、研修修了後、即ある程度職務に耐え得る日本語能力を身に付ける必要があるという環境にあり、また専門的な内容の早期導入の有用性は先行研究でも指摘されている（羽太・熊野 2003）。選択科目には「スピーチ」「漢字」「語彙」「ビジネスタスク」「読解」「外交業務」といった科目があり、ここで専門語彙が導入されている。各科目の概要を以下に示す。

表１　外交官・公務員研修の選択科目

ス　ピ　ー　チ	自国紹介を中心とするスピーチを作成、実際にスピーチを行う
語　　彙	業務に関する語彙を分野別に学習。接辞や品詞転換、縮約形なども学習する
漢　　字	基本的な漢字、及び外交官公務員にとって必要な漢字、語彙を学習する
ビジネスタスク	大使館スタッフへの依頼、アポイントメント等の簡単な業務上の場面を想定した会話クラス
外　交　業　務	ビザの申請と発給、災害と事故、訪問団の準備等の実務的な場面を想定した会話クラス
読　　解	辞書を使用しての新聞の見出しの大まかな把握などを中心とした読解クラス

これらの各科目で専門語彙が紹介されてはいるが、知識のみではなく運用に至ることを目ざすものとしては、「話題に沿って語彙、表現を習得し、口頭運用能力を高める」ことを目標のひとつに挙げているスピーチクラス（羽太・熊野 前掲）、スピーチクラスとリンク（連携）し学習ストラテジーとして形態素等へも言及している語彙クラス（羽太他 2002）、スピーチクラスや語彙クラスの語彙を扱っている漢字クラス（石井他 2004）が、専門語彙学習の中心となっていると考えられる。その中でも研修参加者からの聞き取り調査などで、語彙クラスや漢字クラスで学習した語彙をスピーチで使うというリンク（連携）ができていることがわかっており、スピーチクラスは特に学習の核となっていることが窺える。

逆に、外交業務クラス、読解クラスは運用レベルまでというよりは参考としての語彙の紹介に留まっている。研修修了者を対象に行った追跡調査（和泉元他 2004）からも彼らの日本語ニーズが初級レベルの日本語を基本として、職務上のニーズは国の情報や観光、政治経済などについての社交会話や複雑ではない業務上の場面への対応程度であることがわかっている。新聞を扱う読解クラスや実務的な場面を想定した外交業務クラスで扱われる語彙の多くは、参考にはなっても研修中の到達目標とはなりにくいようである。

選択科目は全て自作教材を使用していることから、導入されている語彙は教師が恣意的に選択したことになるが、スピーチクラスでは、研修参加者自身が大使館に出向いておこなった目標言語調査とニーズ分析の結果からスピーチや会話で必要とされる話題を選定しテキストを作成している（羽太・熊野 前掲）。また、これらの選択科目で扱っている語彙は非常に多岐にわたり量的にもかなり多いが、各自が職務あるいは自国に関する語彙を取捨選択すればいいとしており、覚えるように指示したり、テストで扱ったりはしていない。また、専門語彙はテキストに掲載されていなくても彼ら自身がスピーチ原稿執筆の過程や、日本人との会話を通じて習得しているものも少なくない[(2)]。

3．分析

3.1　分析の目的と手順

日本語の語彙習得に関しては、研究の絶対数が少なく、実際の学習者のデータを扱ったものや実証的な研究はわずかであることが指摘されている（山内 2004）。一方、英語教育においても、実際の語彙習得研究では読解、聴解、単文作成をデータとして扱った実験による実証的な研究がほとんどであり、まとまった作文や口頭発表、会話のデータを扱ったものはいまだ多くないことが指摘されている（Ellis & He 1999、吉澤 2004）。また、実証的な研究では数回程度のテストの結果によるものがほとんどであり、長期的な習得や実際に使用された語彙のデータによる検証が行われた例は少ない。

本稿は外交官・公務員研修における専門語彙についての習得の実態を明らかにすることを目的とし、材料として、研修の最終テストのひとつであるオーラルテストの書き起こしデータと語彙学習の核となっているスピーチクラスの成果であるスピーチ原稿を用い、以下の 2 点の分析を行う。

＜分析 1＞オーラルテストにおける専門語彙の出現を分析する。

＜分析 2＞オーラルテスト結果とスピーチ原稿を比較、分析する。

本研究では学習者の実際のデータとして、オーラルテストに出現した語彙を「習得」された語彙として扱う。統制された実験を行うわけではないため、厳密な意味での「習得」とは言えないかもしれない。また、オーラルテストを用いての分析では、ある語が出現しなかったものの理解語彙である可能性や、使用語彙になってはいても話題上出現しなかったという可能性は残ってしまう。しかし、各研修参加者によって、進度、選択科目の選択等は多様であり、要因を統一することは難しい。実際のコース運営の現実的側面を考えると、共通、あるいは個別の目標としての「専門語彙」とは何なのか、研修参加者の実際のデータから明らかにする意義はあるのではないだろうか。

また、オーラルテストに出現した「専門語彙」がどのような学習の場で習得されていったのかを明らかにするため、外交官・公務員研修の語彙習得の核となっているスピーチクラスのスピーチ原稿との比較、分析を試み、「専門語彙」の実態、また学習の場との関わりについて考察したい。

3.2　＜分析１＞オーラルテストにおける専門語彙の出現

3.2.1　オーラルテストの概要と分析方法

外交官・公務員研修における最終オーラルテストは、専門日本語研修として職務上の目標の達成度を測る必要性や、9 ヶ月の研修で学習した内容の範囲の達成度を測る必要性から独自のテストの開発が進められてきた（熊野他 前掲）。テストの結果は、研修の最終総合評価の軸になるという意味で重要な役割を持っている。テストは生活や職務上の話題について質問し答えるＱ＆Ａ、

社交会話や複雑ではない業務上の話題についてのロールプレイから成り、各項目（談話構成、文法、語彙、発音と流暢さ、理解、待遇表現、説明・描写、意見提出、相互交渉、情報収集）について Excellent、Successful、Good、Fair、Acceptable の 5 段階で評価される。語彙に関しては日常語彙と職務上語彙とに分けて評価が行われている[(3)]。

具体的な分析方法としては、2003 年度、2004 年度の最終オーラルテスト 65 名分の職務に関するＱ＆Ａ部分の書き起こしから、「専門語彙」を抽出し、リストアップした[(4)(5)]。

3.2.2　結果

大まかなトピック毎の語彙の出現状況の一覧を表 2 に示す。ある語が使用されたからといってそれだけでレベルが判定されるわけではないのでレベル間での重なりが見られる。

リストアップ結果から専門語彙のレベル別の習得状況について、以下のようなことがわかった。

①　上位レベル

上位レベル Excellent では、自身の所属や担当業務、国の基本情報、観光といったトピックだけではなく、外交、経済、政治、社会などについての社交会話に必要な基本的な専門語彙を習得している。例えば「経済」に関して、経済状況がいいか悪いか、あるいは二国間の経済関係について貿易に簡単に言及するといったことは good 以上ならできるが、特に Excellent のレベルでは表 2 の経済の項目に見られるように「電気製品」「衣類」「食料品」等の品目名や、「貿易相手国」「投資」「影響」といった語彙を使用して経済関係の詳細を話すことができる。また、表 2 政治・社会の項目にあるように「教育制度」「治安」「失業」「民主化」といった政治・社会問題やその対策について簡単に言及できるだけの語彙を習得している。こういった語彙は Successful や good レベルでも多少は見られるものの、1 つか 2 つが突然現れるだけでまとまった説明とはなっていないことが多い。もちろん国の基本情報などの比較的易しいトピックにおいても、「在日大使館」「宗教国」「多民族国家」などより詳しい説明を可能とするレベルの高い語彙が見られる。

②　下位レベル

下位レベル Acceptable・Fair は自身の所属や担当業務、国の観光、国の位置や気候といった極基本的な情報に関する語彙の習得が中心である。表 2 を見ると、所属や担当業務、観光については Good、Successful とあまり変わらない語彙が見られるが、国の基本情報に関しては、「東南アジア」「太平洋」といった国の位置や「雨季」「乾季」等の気候への言及に留まり、民族や歴史などに関する語彙はあまり見られないことがわかる。また、外交関係や経済に関しては「いいです」「悪いです」以外の言及はできず、また関わりのある語彙も出現しない。尚、Acceptable と Fair の間には出現する語数の差はあるものの、トピックによる差はあまり見られない。

③　中間レベル

Successful,　Good は上記 2 レベルの間にあって、所属や担当業務、国の基本情報、観光、外交についての語彙はある程度あるものの、経済や政治・社会についての語彙はあまりないというレ

表 2　オーラルテストで見られた専門語彙リスト[6]

話題／レベル	Excellent（14 名）	Successful（11 名）	Good（20 名）	Fair（15 名）/Acceptable（5 名）
所属・担当業務	外務省(9)、外交官(6)、大使館(6)、公務員、書記官、在日大使館、中国駐在ベトナム大使館、人事院、内閣官房、アジア第一局、プロトコル局、南アジア部、アジア太平洋課、アジア大洋州課、経済関係課、領事課、担当(4)、政務、領事、北朝鮮、情報(3)、内容、管理	外務省(7)、外交官(6)、大使館(7)、公務員、領事館(2)、報道官、広報部、経済省、係、財務省、アジア部、ヨーロッパ協力部、担当(4)、中国担当、部署、部長	外務省(8)、外交官(9)、大使館(6)、公務員、首相府、観光省、交通省、アジア局、国際関係局、人事課、担当(3)、人事、入国管理、延長、分析、情報、部長、課長(3)	外交官(8)、外務省(4)、大使館(5)、公務員(3)、貿易省、総合政策局、人事局、報道局、アメリカ人局、フィリピン人局、担当(4)入国管理、ビザ延長、政務事務、外交事務、報告書、北朝鮮
国の基本情報	南アジア、東南アジア(2)、中央アジア(2)、西アフリカ、東アフリカ、インド洋、赤道、人 口(4)、約、～倍(3)、面積(3)、平方キロ(2)、面する(2)、首 都(6)、民 族(4)、気候、熱帯(2)、亜熱帯気候、雨季(2)、乾季(3)、蒸し 暑い(2)、四季(2)、宗教(3)、宗教国、イスラム教(4)、仏教(3)、キリスト教(2)、キリスト教徒、多民族国家、島国、歴史(2)、歴史的な(2)、～時代、～世紀	東南アジア(2)　、東南ヨーロッパ(2)、島国、約、～倍、平方キロ、首都(4)、雨季(2)、乾季、大陸的な気候、民族、イスラム教、歴史、独立(3)、～時代、～世紀、戦争、世界戦争、途絶える	東南アジア(3)、中東(4)、北東ヨーロッパ、中央アメリカ、南アメリカ、南米、北米、太平洋、島国(2)、人口、～倍、平方キロ、首都(6)、気候、乾季(3)、雨季、蒸し暑い、宗教、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教、仏教、民族、歴史(2)、歴史的な、～時代、独立宣言	東南アジア、中央アジア、南アジア、北ヨーロッパ、南アメリカ、太平洋、中東、中米、米国、インドシナ半島、人口、平方キロ、首都、乾季、雨季、イスラム教、キリスト教
観光	観光(2)、観光地(2)、観光客、東、西、南、北(2)、自 然、景色、島(3)、湖、砂 漠、～海、～湾、岩山、世界自然遺産、世界文化遺産、国立動物公園、映画祭、交通(2)、寺、習慣(2)、伝統的な	東、島、海岸、城、修道院、建築物、宮殿、観光バス、世界三大仏教、民芸品	南(4)、北(2)、自然、島、島々、～海、教会、遺跡、直行便、伝統的な、県(2)、習慣	観 光、南(3)、北(2)、東、西、自然、遺跡、段々畑、国立公園、山脈、マヤ文化、山々、城、教会、映画祭、交通、習慣
外交	関係(4)、国際関係、経済関係(3)、大統領(6)、首相(4)、外務大臣(3)、大臣、外交、外相、駐日大使、天皇、会談、国交(2)、二国間関係(2)、訪問(6)、訪問団、協力、支援、計画、両国、交流、文化交流、国際交流、国際協力、国際機関、国際会議、文化(6)、文化的な(2)、国交～周年記念、海外、国々	関 係(5)、大 統 領(5)、首 相(2)、大使(2)、外務大臣(4)、大臣、援助(4)、国交(2)、訪問(3)、訪問団(2)、機関、開発、開発パートナー、国際会議、文化(3)、文化的な、海外、安全	関 係(7)、大 統 領(5)、首 相(3)、大使、外務大臣(2)、外相、大臣、皇太子、援助(2)、協力、海外訪問、訪問団、宣言、専門家、国際会議(2)、国際機関、国連、文化(2)、招待	関係(5)、国際関係、外務大臣(2)、国際交流
経済	経済(4)、経済的な(3)、貿易(2)、輸出(6)、輸入(4)、貿易相手国(2)、主な(2)、産業、農業(3)、漁業、工業、機械、金、銅、石油(3)、原 油、油田、石炭、電気製品(4)、電子製品、農業製品、食料品、小麦、米、織物、衣類、投資、影響、見通し、景気、～億、	経済(6)、経済的な(2)、貿易(2)、輸出(4)、輸入、石油、主に、見通し	経済(5)、経済的な(2)、貿易、輸出(2)、輸入(3)、農業	経済(4)、貿易、～億、技術
政治・社会	政治(7)、政府(8)、政策(2)、政治的な(2)、政治問題、社会問題(3)、教育、教育制度、教育費、失業(2)、失業率、民主化、民主国家、都市、都市化、都会、内戦、治安、発展途上国、発展、発達、干ばつ、差、インフラ、解決、平和、生活水準、法律(3)、専門職、人々(2)、市長、技術的な	政治(2)、政府(2)、政治的な、都市政策、教育、社会的な	政治(3)、政治的な、政府(4)、社会、法律、軍人、軍隊、自衛隊、難民、物価(2)、人々	政治(2)、物価

ベルである。この 2 つのレベルは、語彙の量によって判定が左右されることもあり、出現したものだけを見てもはっきりしたことが言えるわけではない。

ただ Successful,　good を大きく特徴づけているのは、理解の程度と英語の使用である。表 3 は

Q&A の中で教師が使用した際に研修参加者が理解できていないことが明らかで、コミュニケーションを阻害した語彙である。Good では、「面積」「気候」「観光地」といったトピックの核となるものや、「関係」「輸入」といった比較的基本的なものが見られるのに対し、Successful レベルでは理解できなかった語彙はごくわずかであることがわかる。Successful では語彙が理解できないことによる会話の中断はほとんどない。基本的な語彙に関してだけではなく、教師の質問内に出現した「景気」「加盟」「治安」「犯罪」などの比較的高いレベルの語彙についても理解し応答しているケースが見られる。

また、Good 以下では、department, division, ministry, religion, prime minister といった基本的な専門語彙の英語代用が見られるのも特徴である。つまり、Good レベルでは所属や担当業務、国の基本情報、観光、外交についての語彙はある程度あるものの、その全てをカバーできているわけではなく、話せる分野、語彙を習得している分野と不得意な分野が分かれているのではないかということが予想される。これについては、Fair 以下も同じである。

表 3　研修参加者が理解できなかった質問中の語彙

	Excellent（14 名）	Successful（11 名）	Good（20 名）	Fair(15 名)/Acceptable(5 名)
理解できなかった語彙	面積(2)、時期、気候(2)、漁業、発達	国交、社会問題(3)、軍隊、戦争	面積(3)、国交(2)、気候(4)、観光地(6)、観光、民族、社会問題(2)、輸入、関係解決、関係、物価、政府、援助	面積(5)、気候(7)、観光地(8)、物価、輸出、米、人口(4)、宗教(2)、国交(2)、経済、季節、関係(3)、輸出、気温、漁業、援助

3.3　＜分析２＞スピーチ原稿との比較

3.3.1　スピーチクラスの概要と分析方法

先に述べたように、スピーチクラスは「専門語彙」学習にとって核となっていると思われる科目である。研修生へのインタビューにおいても「アイデアや新しい語彙のブレーンストーミングができた」「すぐに役立つ表現や語彙を学んだ」「個別指導で適切な語彙を知ることができた」という意見が見られる他、口頭運用能力への影響という点でも「日本語で話す自信がついた」という声が大きい（和泉元他 2005）。また、オーラルテストのＱ＆Ａでなされる職務に関する社交会話程度の質問はスピーチクラスの話題と重なるところが多いため、これを分析することとした。スピーチクラスでは各課は①導入・質問、②原稿作成、③個人指導（原稿・音声）、④個人練習、⑤発表、⑥質疑応答、⑦フィードバック、という流れからなり、学期末には発表会が行われている。扱われたトピックは 2004 年の場合、2 学期に、祭り、地理・民族・宗教、仕事、観光、産業と貿易、二国間関係、3 学期に結婚、経済と人々の生活、習慣の違い、教育問題、社会問題である。詳細は羽太・熊野（前掲）、和泉元他（前掲）を参照されたい。

比較・分析の結果、各レベルの語彙の習得に関して、次のような特徴が明らかになった[7]。

①上位レベル

例 1 は、Excellent レベルの研修参加者のオーラルテストでの発話データとそのトピックを扱ったスピーチ原稿を比較したものである。これを見ると、オーラルテストにおいてスピーチで扱った内容、表現、語彙を利用して発話していることがわかる。ただ、スピーチそのままというわけではなく、「二国間関係」「農業製品」「両国」「政府」などスピーチ原稿にはない語彙も現れている。これらの語彙はこの原稿だけではなく 2、3 学期を通した全てのスピーチ原稿にも見られないものである。「農業」「両国」はスピーチ、語彙、漢字クラスで、「二国間関係」「政府」は上記 3 科目に加えスピーチ、外交業務の各クラスで学習された語彙であり、そういった語彙をうまくとりこんでいることがわかる。

例 1　トピック「二国間関係」[8]

＜オーラルテスト＞	**＜2 学期二国間関係クラス内スピーチ原稿＞**
T : あの、日本と［国名］の関係は、今どうなんですか。観光客は 2 週間に 1 回ぐらいということですが。 S : ［国名］と日本の関係は、今とても強い。あー、その、この二国間関係は、1963 年に国交が結びました。あー、そのときから（ふん）たくさん、あー、たくさん計画があります。例えば、わたし、わたくしの大統領、{咳}すみません、わたくしの大統領は日本へ、今 3 回訪問しました。日本人の政府の、の、大臣も［国名］へ訪問しました。あー、経済的な関係は、例えば日本から有名な電気製品とか、あー、車とか、［国名］人は日本、日本の、の製品大好きです。（ふーん）それ、それに［国名］人、［国名］からは、は農業製品、例えば、例えば、コーヒー、や魚を輸出しています。あの、でも、あの、日本の製品は、日本の輸出は、［国名］の輸出より、あ、大きいと思います。（ふん）でも、だんだんな、強くなります。（ふん）それに文化的な、関係は、強い、あー例えば、毎、毎年、（ふん）［国名］では日本の映画祭があります。（あーん、そうなんですか）それで、あん、両国の間も、留、留学生、はい、留学生があります。日本人の留学生は［国名］にいます。［国名］人の留学生も日本にいます。例えば、JICA と Japan Foundation、を管理しています。たくさん、わたくし、例えば。{笑い}　そう、1963 年から今まで、だんだん強くなります。	**［国名］と日本は 1962 年にこっこうをむすびました。そのとしに［国名］がどくりつしたからです。そのご、かんけいがだんだんつよくなりました。［国名］の大統領は３かい日本をほうもんしました。1998 年にはにほんのふくがいむ だいじんがほうもんしました。** **つぎにけいざいてきなかんけいについて　おはなししましょう。［国名］に日本のかいしゃがすこしあります。でも［国名］人はにほんでつくったでんきせいひんがだいすきです。たとえばテレビやパソコンなどがすきです。にほんのくるまもたくさんゆにゅうしています。そして日本にさかなやコーヒーなどをゆしゅつしています。にほんはいろいろなけいかくにえんじょしています。** **さいごにぶんかてきな関係についておはなします。［国名］ににほんじんのりゅうがくせいがたくさんいますけど、にほんにいる［国名］人のかずはもっと多いです。JICA と Japan がかんりします。まいとしにほんのえいがさいが［国名］でおこなわれます。［国名］と日本のかんけいはいいです。そしてだんだんつよくなっていると思います。**

例 2　トピック「仕事」（スピーチ原稿作成せず）

Ｔ：じゃ、もし［人名］さんが日本の大使館で働くようになったら、どんな仕事をしたいですか。 Ｓ：えと、全部いい。わたしの国と日本の関係はとてもいいです。政治的な関係はとてもいいですから、たぶん文化交流と経済的な交流の方がいいと思います。そして、日本人は［国名］のことをもっとわかったら、たぶんもっと旅行、もっと観光客、日本人の観光客いる、ある、いるでしょう。そして、たぶんもっと投資あります、あると思います。

スピーチ原稿の作成はあるトピックについての情報をまとめる機会にもなっていることから、他のレベルの研修参加者のオーラルテストでの発話を見ても例 1 のようにスピーチの内容をベースとしたものは少なくない。しかし、このレベルではスピーチで扱った内容でなくてもまとまった話ができるという特徴が見られる。例 2 の研修参加者はこの例 2 の内容でのスピーチ原稿は作成していないが、その場で専門語彙を使用し、ある程度まとまった内容を構成して説明していることがわかる。ここで使用されている「関係」「政治的な」「文化交流」「投資」といった語彙は、他のトピックのスピーチ原稿でも使用され、また語彙や漢字等のクラスでも扱われているものである。

これらから、上位レベルにおいては専門語彙をスピーチクラスを中心として他の科目あるいはスピーチクラスでのフィードバック等からも有機的に習得していることが窺える。

②中位レベル

Successful,　Good の中位レベルにおいても、上位レベルと同じようにスピーチを中心とする語彙習得が窺えるケースが多く見られる。しかし、例 3 からわかるようにスピーチをそのまま利用するに留まり、上位者で見られたようなスピーチで使用しなかった他の語彙の使用などはあまり見られない。スピーチで使用していない語彙が全く習得されていないというわけではないのだが、例 4 のように語彙は出現していても、まとまりを欠くわかりにくい発話となってしまうことが少なくないのである。

この 2 つの例から、中位レベルにおいてはスピーチ以外でも専門語彙の習得はなされているが、スピーチを通して学習されたものは更に十分な使用レベルに引き上げられていると考えられる。スピーチの丸覚えといわれればそうなのかもしれないが、学習から 2 ヶ月以上を経たオーラルテストで使用語彙として出現するという定着の度合いに注目したい。

ただ、これは全ての研修参加者に当てはまるものではなく、スピーチやその他の選択科目を多く選択していてもオーラルテストでは専門語彙をあまり使えなかったり理解できなかったりした研修参加者がいたことも事実である。また、Good では既に触れたようにトピックによってよく話せるものとそうでないものがはっきりしているような場合もあった。スピーチクラスでは覚えることは要求していないが、研修参加者は自ら暗記してきたり、メモを作成するなどそれぞれに学習の工夫をしているようである（羽太・熊野 前掲）。スピーチクラスが語彙習得に与える影響は小さくはないものの、個人の学習ストラテジーもやはり大きな位置を占めているのだろう。

例 3　トピック「二国間関係」

＜オーラルテスト＞ T : あの、日本と［国名］は今どんな関係ですか。 S : あーそうですね、もちろんあー日本と［国名］の関係、いいと思います。あー例えば、今、日本、日本、日本は［国名］の、あー重要な開発パートナーです。あー、例えば［国名］、あーたくさん援助、日本から、あーしてくれます。はい。 T : あのー日本と［国名］はいつ国交を結びましたか。 S : はいはい、［国名］独立しました。後で、2 年、2 年、2002 年、に、国交を結びました。（あ、そうですか、あの）後で、後で［国名］で日本の大使館、大使館、を開きました。	**＜2 学期二国間関係クラス内スピーチ原稿＞** **［国名］とにほんは 2002 年に　こっこうをむすびました。そして、にほんのたいしかんをひらきました。（中略）** **1999 ねんににほんで［国名］へのえんじょかいぎがありました。1999 ねんからにほんは［国名］のじゅうよなかいはつパートナーです。1999 ねんからどくりつするまでの３ねんかん　日本は［国名］に　いちおくろくせんごひゃくさんじゅうアメリカドルの　えんじょをしました。** **＜2 学期発表会スピーチ原稿＞** **にほんのひとびとと　にほんせいふは　［国名］にたくさんのえんじょをしてくれました。にほんは［国名］のじゅうようなかいはつパートナーです。**

例 4　トピック「仕事」(スピーチ原稿作成せず。例 3 と同じ研修参加者)

T : お仕事はなんですか。 S : 私は外務省の consulate 局、あーに、働いています。はい。 T : あの、お仕事の内容について簡単に説明してもらえますか。どういうお仕事ですか。 S : あー、私は担当は　あー、た、あー、た、consulate、あー、consulate＊＊で、あー、例えば［国名］の、あー、［国名］のあー大使館、たい［国名］の大使館、海外にあります。あー consulate 問題、あー私、私の仕事は、あー、国交、と、こっこう？をあげあげあげます。をあげます、と手伝って、手伝っています。あー私の仕事、あー日本語でせつ、説明、説明が、できできないと思います。

③　下位レベル

下のレベルは＜分析 1＞でみたように、自身の所属や担当業務、国の観光、国の位置や気候に関する語彙習得がなされていた程度で、理解できない語彙も少なくなかったレベルである。学習の負担からスピーチクラスをとっていない参加者の割合も比較的高い。オーラルテストで現れた語彙は、所属や担当、国の位置など複数の科目で繰り返し扱われているものが多く、スピーチでの習得が中心となっているとは断定できない。「首都」「城」「国立公園」といった観光に関する語彙など他の科目で扱われていないものについては、スピーチクラスでの習得が考えられるが、例 5、6 のように一文が一部利用されたり、単語レベルとして現れるに留まる場合が多い。

例 5　トピック「国紹介」

＜オーラルテスト＞ T : ［国名］のお勧めの観光地はどこですか。 S : ［地名］(［地名］)はい。 T : どんなところですか。 S : あーちょっと首都 T : 首都 S : はい。 T : 首都にあります。 S : はい、首都にあります。 T : でも私はイメージがありませんから、もう少し教えて下さい。 S : イメージと［国名］、しゅ、［国名］の首都は［首都名］です。古い所や、と、am 城やあります	**＜2 学期発表会スピーチ原稿＞** **［国名］は　アラビア はんとう に　あります。ちかくに　［国名］や［国名］が　あります。しゅとは［首都名］です。** **（中略）** **［国名］のみりょくは　ながい　れきし が　あることです。　そして　ぼうえき の　くに　として　ゆうめいです。［国名］には　いまも　ふるい おしろ や　とりで が　あります。ですから　たくさんの　りょこうしゃ が　がいこく　から　きます。**

例 6　トピック「国紹介」

＜オーラルテスト＞ T : どんなところですか。 S : んーきれいなところ。ん、はい。山々。 T : 何がありますか。 S : あー国立公園と、どやぶつも、ありますね。 T : どやぶつ。 S : これ。どやぶーつ。	**＜2 学期発表会スピーチ原稿＞** **うつくしいこくりつこうえんや　みずうみ や　[山の名前]さんが　ゆうめいです。** **（略）** **それからいろいろな　やせい のどうぶつが　みられます。**

4．考察

分析結果から、外交官・公務員研修の専門語彙習得の実態と習得に関与する学習の場について、以下のような点が見られた。

4.1　専門語彙の習得

外交官・公務員研修の専門語彙習得の実態について、まず、下位レベルでも「所属・担当業務、国の基本情報、観光」等については初級レベル以上の語彙が多くはないが習得されていることがわかった。また、上位レベルでは学習した専門語彙が十分に使用語彙として機能していることがわかった。上位レベルではさまざまな科目の中で語彙を学ぶことが相乗効果をもたらし、有機的に使用するレベルに至っていると推測される。これらから、初級でも専門語彙を理解のみでなく、運用レベルまで習得するという目標設定が可能であると言えるだろう。先行研究においても、職業人の場合、明確なニーズが動機づけとなるため、専門的な内容だからといって難しいと感じるわけではないことや、職業上知っている概念を利用したり、職業上行うタスクを利用したりすれば、学習が容易になり初級であっても習得が進むことが示唆されている（工藤 1994, 羽太・熊野前掲）。

一方、今回の分析結果から、各レベルによって使用できる語彙や使い方に特徴があることもわかった。下位レベルでは語彙のトピック範囲が「所属・担当業務、国の基本情報、観光」に限られるのに対し、中位レベルではそれに加え「外交」などを簡単に言及するための語彙、上位レベルではさらに「経済、政治・社会」についても詳細に説明できるだけの語彙が習得されていることがわかった。これらは今後各研修生のレベルに応じた専門語彙の目標設定、教材作成等に還元できるデータである。

4.2　繰り返される学習の場

このような専門語彙が習得された要因としては以下の点が考えられるだろう。まず、語彙がさまざまな科目のなかで「繰り返し」提出されていること。さらに、語彙学習の核となっているスピーチクラスではクラス活動自体の中で、同じ語彙がさまざまなタスクの中で何度も繰り返され、習得につながっていると考えられる。

Rott（1999）は読解（incidental reading）における出現頻度と語彙習得の効果についての実験を行った結果、出現頻度が 2 回と 4 回ではあまり変わらないのに対し、6 回だと高い記憶保持（retention）を示すことを指摘している。この研究は 2 週間程度の間隔での実験が多い中で 1 ヵ月後という長期的な効果についても確認している稀な調査結果である。この結果は読解によるインプットによるものではあるが、長期的な記憶保持（語彙の習得）には語彙が繰り返し提出される必要性があることを示唆するものであろう。また、同じタスクを繰り返し行うことは特定の運用における流暢さ、複雑さ、正確さの向上に効果があるとの結果も報告されている（Bygate 1999）。

また、インプットとアウトプットの習得への効果については多くの議論があるが、インプットより、アウトプットのほうが習得効果があるという調査結果も報告されている（Ellis &He 1999, Kitajima 2001, Izumi 2002, 横山 2004）。また、読解によるインプットと単純な単文作成によるアウトプットとを比較し、アウトプットの効果を否定する議論に対し、Izumi（前掲）では形式ではなく、文脈が豊富な場合にはアウトプットが効果的だということを指摘しており、時間をかければ作文のほうが読解より使用語彙につながるという指摘もある（Stuart　2005）。さらに、語彙学習の理論として注目されている involvement 理論では必要性、探索、評価などタスクに関わる度合いが強いほど語彙習得が進むと言われている（Laufer& Hulstijn 2001）。

外交官・公務員研修の学習の場をこれらの点から見てみると、まず、スピーチクラスでは作文、発表などアウトプットの機会、会話、質疑応答などインターアクションのある活動が多い。そして、各自が話したいと思う文脈豊富なテクストの中で時間をかけて語彙学習がなされていると考えられる。また、職業上ニーズから学習者自らの強い動機や必要性があり、スピーチ原稿作成においても辞書や他科目の語彙リスト、ホームページなどでの探索が行われ、教師との原稿チェックなどでどの語が文脈に適切かについて評価もなされるなど、タスクへの involvement が強く、それが繰り返し行われる。さらに、さまざまな科目との有機的なつながりもある。専門語彙の習

得はこれらの学習環境から促進されていると考えられる。

5. おわりに

外交官・公務員研修では熊野他（前掲）でオーラルテストの書き起こしデータから、オーラルテストの評価基準を学習者の現実的な目標レベルに改訂するという試みを行った。本稿も学習者の実際のデータから専門語彙の習得の実態を明らかにし、コースデザインに還元していく試みの一つである。

今回の分析では研修開始 4〜5 ヶ月目に提出された語彙が研修終了時 9 ヶ月目のオーラルテストで出現している。語彙の習得研究では直後と 2 週間程度の遅延効果を測る短期的な実験研究が多い中で、長期的な語彙習得の実態を示すものとしては意義があるのではないだろうか。また、語彙習得研究では読解、聴解などインプットによる研究は進んでいるが、アウトプットに関しては単文作成の範囲にとどまっている。本稿ではスピーチ原稿作成という文脈のあるまとまった作文やオーラルテストという会話形式のデータを分析し、長期的な語彙習得の可能性が示唆された。今後ともこのような実際のデータ、作文や会話データによる調査を続けるとともに、どのような学習が語彙習得に効果的なのか、さまざまな科目の中での有機的なつながりが語彙習得にどのように関わっていくのかなどを事例的にも実証的にも検証していく必要があるだろう。

一方、語彙知識とスピーキング能力の予測可能性について Koizumi（2005）はスピーキング能力の半分以上が発表語彙知識によって予測可能であることを指摘している。今回の分析で、各レベルによって使用できる専門語彙のトピック範囲、語彙の使われ方などの特徴が明らかになった。今後これらの語彙の習得状況を確認することで、口頭能力を予測できるという可能性もあるだろう。

本稿ではオーラルテストとスピーチ原稿の分析から、外交官・公務員研修における「専門語彙」とは何なのか、その実態を追及した。これは専門日本語教育における「専門」とは何を指すのかを明らかにしていく一つのステップでもある。関西国際センターにおける外交官・公務員研修は 9 年を経て選択科目の充実など拡充の方向をたどってきたが、その経験や蓄積の中から得られた知見をもとに絞りこんでいくことも必要な時期に来ているといえる。研修ではあまりに多くの語彙を提出されて負担に感じる研修生が多い。専門語彙についてある程度の習得の目安を示すリストのようなものを作れば、学習者が目標設定や学習の優先順位を考える際の手助けになるのではないだろうか。また、教師にとっても各教科での教材開発やカリキュラムデザインの際の目安ともなるだろう。今後とも研修の中で蓄積されたデータを分析し、コースデザインに還元していきたい。

〔注〕

(1)基本的には研修で採用している初級の総合テキスト『みんなの日本語』以外で導入される語彙で専門に関わりのあるものとする。ただし、総合テキストで提出されているものでも、「首相、大使館、大統領、貿易」などを専門語彙とした。「会議」「文化」「教会」など一般的な語彙なのか専門語彙なのか線引きが難しいものに関しては、統一を図るために本稿では他の選択科目において総合テキストよりも早期に導入されているものを専門語彙とした。そのため「東西南北」「島」など一般的だと思われる語も一部専門語彙となっている。

(2)研修生によって選択する科目は異なっており、例えばスピーチクラスの選択率は 2 学期 80%、3 学期 30%程度である。上位者の方が多くの科目を 3 学期まで選択することが多い。

(3)「職務上語彙」は本稿での「専門語彙」と同一である。オーラルテストの評価表は研修参加者及び所属期間へのフィードバックの役割を担っているため、より分かりやすく「職務上語彙」としてある。

(4)リストアップに際しては、次のような基準を設けた。

①教師の質問で提示された語彙をそのまま答える際に使用した場合は、理解していてもリストには入れない。

②教師の質問後、一文以上挟んだ後、あるいはターンが一回以上渡った後に使用した場合は入れる。教師が発話した時点で理解できず、その後使用したものは一文以上挟んでいても入れない。

③誤用や、発音が悪く理解できないものは入れない。

④①のような理解語彙、理解できなかった語彙、英語を使用した語彙も記録する。

(5)研修参加者について、外交官・公務員研修は基本的にゼロ初級を対象としているが、数名の既習者も存在する。その内、最終的に学習到達度に大きな差がなく、同じ評価表で評価を行った者 5 名をここに含んでいる。また、専門用語には漢語が少なくないが、中国語、韓国語を母語とする者はゼロ、中国語学習歴のある者は 3 名である。

(6)複数のトピックに渡る語彙も少なくない。例えば「外務大臣」という語彙は「業務」、「外交関係」の両トピックで現れ、「経済」「政治」といった語彙が担当業務の内容である場合もある。ここでは統一するため便宜上、上レベルで多かった話題に入れてある。なお、（　）内は人数、（　）のない場合は 1 人。

(7)総合テキスト　『みんなの日本語』の進度は、レベル別に 3 段階あり、上位の者は 2 冊目を、Fair 以下は 1 冊目を終了する程度である。また、選択科目に関しても上位者は語彙や読解など複数の科目を選択していることが多く、インプットとして上位レベルと下位レベルで差がある。

(8)表中の網掛け部分は、オーラルテストと原稿の両方で出現した専門語彙、四角は片方でのみ見られた専門語彙を示す。複数回ある場合はひとつだけ示した。また、（　　）内は聞き手のあいづち、{　}は笑いなどの非言語表現、＊＊は聞きとれない部分を表す。

〔参考文献〕

石井容子・熊野七絵・田中哲哉（2004）「外交官にとって必要な漢字教育の試み」『日本語国際センター紀要』第 14 号、pp.141-147

和泉元千春・岡本仁宏・野田昭彦（2004）「研修修了者追跡調査手法確立への一考察－国際交流基金関西国際センターにおける研修修了者追跡調査の試み－」『日本語国際センター紀要』第 14 号、pp.105-122

和泉元千春・羽太園・青山眞子（2005）「スピーチを取り入れたコースにおける学習成果に関する認識－『初級からの日本語スピーチ』を使ったスピーチクラスでのケーススタディー」『日本語教育学会春季大会予稿集』、pp.112-117

工藤節子（1994）「JSP におけるタスク中心のカリキュラム」『日本語学』13-12、pp.62-70、明治書院

熊野七絵・石井容子・亀井元子・田中哲哉・岩澤和宏・栗原幸則（2005）「初級レベルの専門日本語研修のためのオーラルテスト評価基準開発－外交官・公務員日本語研修での試み－」『国際交流基金日本語教育紀要』第 1 号、pp.175-188

小宮千鶴子（1995）「専門日本語教育の専門語－経済の基本的な専門語の特定を目指して－」『日本語教育』86 号、pp.81-92

田丸淑子（1994）「ビジネス・スクールの日本語教育－コース・デザインの課題－」『日本語学』13-12, pp.54-61、明治書院

羽太園・和泉元千春・上田和子（2002）「初級からの専門日本語のカリキュラム・デザイン－外交官・公務員研修における専門語彙・スピーチクラスの実践－」『日本語国際センター紀要』第 12 号、pp.115-121

羽太園・熊野七絵（2003）「職業人の特性を生かす学習環境－外交官・公務員日本語研修スピーチクラスの検証－」『日本語国際センター紀要』第 13 号、pp.47-63

深尾百合子（2001）「『専門日本語教育』研究の現状と展望」『日本語教育学会秋季大会予稿集』、pp.233-234

水本光美・池田隆介（2003）「導入教育における「基礎専門語」の重要性－環境工学系留学生のための語彙調査と分析から－」『専門日本語教育研究』第 5 号、pp.21-28

山内博之（2004）「語彙習得研究の方法－茶筌と N グラム統計」『第二言語としての日本語の習得研究』第 7 号、pp.141-162、第二言語習得研究会

横山紀子（2004）「言語習得におけるインプットとアウトプットの果たす役割－単語の習得調査の分析から－」『日本語国際センター紀要』第 14 号、pp.1-11

吉澤真由美（2004）「L2 読解における incidental vocabulary learning－教育的支援に関する研究の概観と今後の課題－」『言語文化と日本語教育』2004 年 11 月号増刊特集号、pp.88-108、日本言語文化学研究会

Bygate,M.（1999）Task as context for the framing, reframing and unframing of language. *System*, 27, pp.33-48

Ellis,R.& He,X.（1999）The roles of modified input and output in the incidental acquisition of word meanings. *Studies in Second Language Acquisition*, 21, pp.285-301

Izumi,S.（2002）Output, input enhancement, and the noticing hypothesis : An experimental study on ESL Relativization. *Studies in Second Language Acquisition*, 24, pp.541-577

Kitajima,R.（2001）The Effect of Instructional Conditions on Students' Vocabulary Retention. *Foreign Language Annals*, Vol.34, No.5, pp.470-482

Koizumi,R.（2005）Predicting Speaking Ability From Vocabulary Knowledge. 『日本言語テスト学会研究紀要』7 号、pp.1-20

Laufer, B. & Hulstijn, J.（2001）Incidental vocabulary acquisition in a second language : The construct of task-induced involvement. *Applied Linguistics*, 22, pp.1-26

Rott, S.（1999）The effect of exposure frequency on intermediate language learners' incidental vocabulary acquisition and retention through reading, *Studies in Second Language Acquisition*, 21, pp.589-619

Stuart W.（2005）Receptive and Productive Vocabulary Learning : The Effects of Reading and Writing on Word Knowledge, *Studies in Second Language Acquisition*, 27, pp.33-52